

えることには無理があると考えている。

当遺跡6・7区出土の土器片錐については、住居跡および土壌内の覆土中から散在的に出土しており、床面上の一定の場所からまとめて出土するような所見は得られなかった。東京都世田谷区下野毛遺跡の第5号住居跡および第8号住居跡からは、それぞれ土器片錐11点と8点がまとまって床面直上から出土した調査例が報告されている。⁽⁴⁾ 第5号住居跡では円形の礫4点が伴出したという。この調査にたずさわった大槻信次氏は、別稿においてこの事例を紹介するとともに、⁽⁵⁾ 第5号住居跡出土の土器片錐10個と円形の礫4個、第8号住居跡出土の土器片錐18個と円形礫1個は、それぞれ「この地域の河川における漁網につけられた錐具の必要セット数であったこと」が推定されると記している。(・は報告書および論文に記されたままの数である。)

大変に貴重な報告例であるが、伴出してセットとして認定された土器片錐が、報告書中のどれに相当し、1点1点の重量以外に総合しての重量（セットとしての重量）が知りたいものであるが、それが分からなかった点は残念である。また、伴出したとされる円形礫の重量についても報告して欲しかった。それらが判明すれば、漁網の規模などをより具体的に知り得たものではないかと思われる。

なお、当遺跡1・2区出土の土器片錐および網漁に関する詳細な考察が、報告書に展開されている。

註1 a 渡辺誠『“土器破片利用の土錐”に関する二、三の考察』 1961年

b 渡辺誠『縄文時代の漁業』 雄山閣 1973年

c 柳澤清一「土錐」『貝鳥貝塚』 花泉町教育委員会 1970年

註2 斎藤弘道「土器片錐に関する二、三のメモ」『常総台地』5 1970年

註3 勝田市三反田覗塚貝塚、同君ヶ台貝塚、東海村御所内貝塚、同平原貝塚などの出土資料中に好例がある。

註4 浦野千佳子「土製品」『下野毛遺跡』 世田谷区教育委員会 1984年

註5 大槻信次「縄文中期末における網漁業の一資料」『武藏野』 第61巻第1号 1983年

(2) 土製円板について

土製円板は、土器片を再利用して直径4～5cmに丸く加工した土製品である。当遺跡6・7区出土の土製円板も直径4～5cm前後のものが多いが、直径2.5cm前後のものから直径7～8cm前後のものまでみられる。当遺跡から出土した土器の大半が、縄文中期後半の加曾利E III・IV式期のものであることから、土製円板・有孔円板もこの時期のものと考えられる。

当遺跡6・7区出土の資料については、土製品の項において、整形方法および形態、重量など

を報告したもので、ここでは土製円板を中心に、一般的な時間的変遷、分布および用途について若干検討することにしたい。

この種の円板について報告している例は多いが、論攷・考察を加えている例は少ない。渡辺幸子⁽¹⁾、上野佳也氏⁽²⁾の集成・分析・検討を知るだけである。報告書において考察されている例は多くあると思われるが、省略させていただいた。

土製円板の出現は、現在までのところ縄文時代草創期までさかのぼり、隆線文系土器群に伴うものとして、長崎県福井洞窟出土例などがあり、撚糸文系土器群にも少数ながら伴っている。早期・前期にも類例はみられるが、量的に増加をみると中期後半からであり、以降晩期まで継続している。出土遺跡の地理的分布も広く、東北・関東・中部・北陸地方に多い。

土製円板の用途については、いくつかの考え方方が提出されている。まず、第一にあげられるのが、土製円板を通称メンコと呼ぶがごとく、子供の玩具とする考え方である。しかし、これについては証明する術がない。第二には土製円板を有孔円板の未成品とする考え方である。この考え方方は、一見妥当性を有するようであるが、良く考えてみると可能性が低いように思われる。土製円板と有孔円板は同一遺跡から出土することは多いが、遺跡によって両者の出土量の差が大きい。また、穿孔途中の土製円板はみられるが、全体の出土数の中ではわずかである。更に、孔の大きさ、穿孔方法などから考えても、無孔の土製円板が使用によって有孔となったものとは考え難い。すなわち、円板の径に対して孔の大きいものが当遺跡出土例には目立ち、穿孔方法も表裏両面から穿たれているものがほとんどであることから、使用方法にもよううが、一般的には使用により無孔から有孔へ変ったとは考えられない。しかし、遺跡や時期によっては、円板の径に対して孔径の小さい例が多数出土する場合もあり、上記の可能性が全く否定されるべきものともいえない。

次には、これらを土器の補修具とみる考え方がある。これは故甲野勇氏が、青森県八戸市是川中居遺跡出土土器の中に、土製円板を欠損部の補修用に使った例のあることを指摘したことによるが、その後の大規模な調査資料の増加にもかかわらず同種の例は報告されていない。したがって、上野佳也氏の考えるごとく、土製円板一般を土器の補修具とするよりも、是川例を例外的な転用例とみた方が適当であろう。

次に土製円板を換算具とする考え方もあるが、第一の子供の玩具と同様に具体的に証明すべき手立てが示されておらず、可能性があるという程度にしか考えられない。

なお、この他に土製円板を出土状態から「祭祀具」の一種とみるべき可能性も指摘されているが、これまた具体性を欠いている。

上野佳也氏は、上記の他に土製円板の用途として、重さの計量具とする考え方、投げる道具としての考え方などを提出しつつも否定し、結論として土製円板を竹筒の蓋とする意見を強く打ち出し

(2)
ている。

当遺跡出土の土製円板についても、上記の各説に対比して用途を考えるべきであろうが、いずれも可能性にとどまるものであり、今後ともに検討を重ねていくべきである。

- 註1 渡辺幸子「縄文時代における所謂「土製円板」に関する研究」『研究紀要』第3冊 福島大學考古学研究会 1973年
- 註2 上野佳也「縄文時代の土製円盤について」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』 1983年
- 註3 鎌木義昌他「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社 1967年
- 註4 甲野勇「青森県三戸郡是川村中居石器時代遺跡調査概報」『史前学雑誌』第2巻第4号 1930年
- 註5 鈴木正博他「縄紋時代の換算具」『常総台地』11 1979年
- 註6 町田信「土器片利用の円板」『月刊考古学ジャーナル』第78号 1973年
- 註7 中村良幸『立石遺跡』大迫町教育委員会 1979年